NHK ニュース「ほっと関西」へ
抗議と話し合いの申し入れ

NHK ニュース「ほっと関西」担当者様

2022 年 4 月 5 日

高校問題を考える大阪連絡会
代表　鈴木留美子
連絡先
松森俊尚
〒536-0006
大阪市城東区野江 2-11-15
℡　090-1960-3469
Mail matumori@crux.ocn.ne.jp

“高校問題を考える大阪連絡会”と申します。障害者の高校受験をはじめ、大阪府内で障害者の教育をめぐる様々な問題に取り組んでいる市民団体をつなぐ連絡会です。

日頃 NHK の番組を視聴させていただいています。NHK アーカイブ、ドキュメントなど今も心に強く残っているものも多々あり、今後とも注目して行きたいと思っています。中でも、『バリバラ』は家族そろって観ながら団欒の話題に花を咲かせたり、いつの間にか真剣な議論になったりするなど、私たちが集う場でも感想や意見が交流されるなど人気のある番組になっています。また、多くの仲間たちも出演しています。

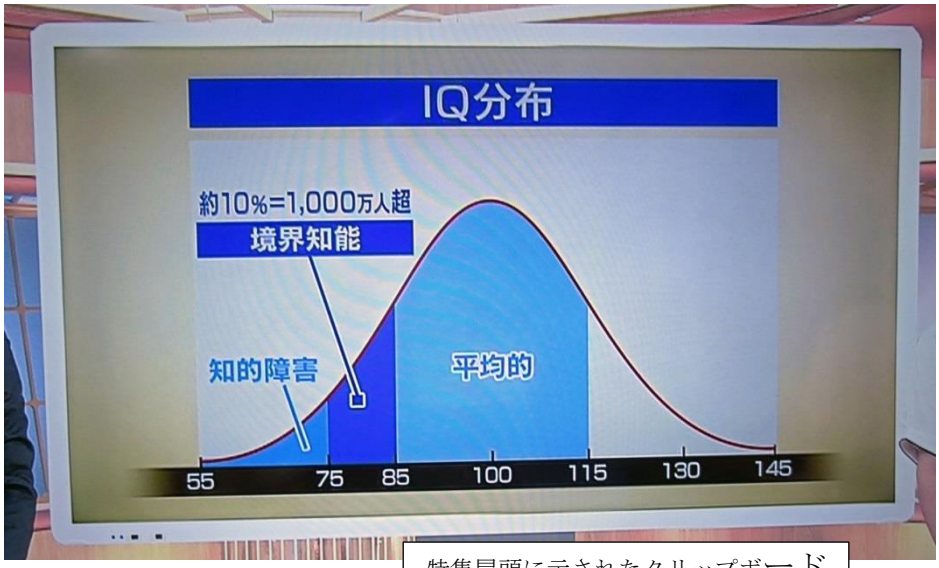
▼障害者は保護されるべき対象ではなく、権利の主体である。▼身近な人間関係から考える多様性ということの意味。▼早期発見、早期療育という「医学モデル」ではなく、障害者が健常者と共に生きることができない社会の側に問題があるという「社会モデル」への障害観の転換…などなど、障害当事者の言葉、表現を通して気づかされることは、視聴者にとって目からうろこが落ちるほど新鮮で貴重な経験となっているのではないかと思います。

国連障害者権利条約や、障害者基本法、障害者差別解消法などが高らかにうたう「全ての国民が、障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会を実現する」という目標の実現に向けて、NHK が努力されておられることの証でもあるのだろうと解釈しているところです。

ところが昨年（2021 年）７月５日放送の“NHK ニュース「ほっと関西」を視聴した会員から以下のような話が出され、“高校問題を考える会”としてもその対応を検討してきました。その間にも二人の会員が個人として NHK の窓口や、「ほっと関西」担当窓口に対して、問題提起と話し合いを求める訴状を送りましたが、まったく返事をいただくことはありませんでした。会員の訴えは以下のようなものです

私が自宅で通りすがりにテレビの画面が目に入り「えっ」と思い釘付けになったことがありました。「ほっと関西」の番組で、キャスター二人の間の大きな画面に IQ の曲線グラフが映し出されていました。あわてて録画設定のボタンを押したのですが、そのグラフを掲げたキャスターの発言は撮れていませんでした。しかし、わずかに私の耳に残っている言葉と、そのつづきの映像（これは最後まで録画しています）を観れば、多分以下のようであったのではないかと推察しています。

――この数値以上は「健常」で、この数値以下は「知的障害」があるといわれている。その「健常と障害の間」に、「境界知能」（グレーゾーン）の子どもたちがいて、その子どもたちは普通の教室では黒板の字が写せなかったり、先生の話が聞けなかったり、教室を飛び出してしまったり、授業について行けなくて困っている――



特集冒頭に示されたクリップボード

そして和泉市立国府小学校で「境界知能」の児童を別室に抜き出して「点つなぎ」のトレーニングをしている映像が流れ、約３割の子どもが通常学級に戻ることができたと成果が報告されます。提唱者の立命館大学の宮口幸治教授の話しを交えて、「コグトレ」の認知機能のトレーニング方法が紹介されます。最後に「岸和田、吹田、豊中でも取り入れる動きがあり、関西各地で広がっています」とまとめて終わりました。

私たちは「コグトレ」及び今回の報道に対して、次のような観点から具体的な問題を指摘しながら抗議を行います。

（1）科学的装いをこらした非科学性が差別を助長する。

（2）「多様性の尊重」という名のもとに、ますます「分離」が進められている。これはインクルーシブ教育ではない。

（3）経済対策としての障害者政策。

（4）学校現場へのリテラシーなきコグトレの導入をますます助長させている。

以下、詳述します――

（1）科学的装いをこらした非科学性が差別を助長する

①IQ が差別や人権侵害をもたらしてきた歴史的経過や、役割についての考察が全くなく、「子どもの能力をはかる客観的な数値・尺度」という、あまりに安易な使い方がされている。

②「優生保護法」が 1996 年、ほんの 20 数年前まで続き、障害者の強制不妊手術が合法的に行われ奨励されてきたという現実。経済発展をめざして生産を阻害しないよう社会防衛のために国家が進めた精神障害者の「隔離収容政策」。相模原の津久井やまゆり園での知的障害者を狙った虐殺事件。それらに通底する「優生思想」を支え続けてきた報道としての責任、また学校教育の責任について、まったく反省することもなく IQ を使っているのではないか。

③「境界知能」という能力のカテゴリーの正当性を裏付ける科学的根拠をもって報道されているのだろうか。

（2）「多様性の尊重」という名のもとに、ますます「分離」が進められている。これはインクルーシブ教育ではない。

④「境界知能の子ども」という新たなカテゴリーをつくって、普通教室、支援学級の他に、い

わば「コグトレ教室」というべきもう一つの分離の場をつくっている。
⑤「境界知能」と判断して、保護者に抽出を勧める教員の判断基準は何なのか？「治った・直った・改善した」と判断する教員の判断基準は、一体何なのか？その基準に触れないまま、「点つなぎ」の速さと正確さを判断して教員が児童の力が「のびた」、「できるようになった」と評価、判断して、「のびた・できた」子どもを通常学級に帰して行くことを成果として報道している。3 割の子どもが通常学級に戻れたと成果をうたっているが、残された 7 割の子どもたちの思いはどのように考えているのだろうか。
⑥「教える側」からしか見ていない、当事者である「学ぶ側」からの視点がない。子どもの主体性が無視されている。
⑦「社会モデル」ではなく、典型的な「医学モデル」の障害観に立っている。
「ひとりひとりの子どもの『困った感』にあった『合理的配慮』が必要」という言い方をしているが、その具体的な方法がクラスの子どもたちから引き離して「点つなぎ」の訓練をさせることなのだろうか。「点つなぎ」の 30 種類に及ぶトレーニングは「訓練」であって授業ではなく、学習でもなく、教育でもない。また学習の世界の多様性から言えば、あまりにも限られた「トレーニング方法」である。
⑧「点つなぎ」の訓練（コグトレ）を受けさせたい親が塾に行かせるのは仕方がないのかもしれないが、これを学校教育として取り込むことについての是非について、一切触れられていない。批判的なコメントなしに一方的に「良いもの」として報道する姿勢が疑われる。
（3）経済対策としての障害者政策
⑨これまで「百マス計算」「ユニバーサルデザインの授業」…など、全国の学校現場で「流行」し、またすたれていった様々な教育的「ハウツー」があったが、「コグトレ」はそれらと一線を画するちがった意味づけがあると考えている。それは、福祉予算・経費の圧縮という経済対策が背景にある。
⑩この「コグトレ」の提唱者、宮口幸治教授は、立命館大学の教員紹介ページ
http://www.ritsumei.ac.jp/gshs/teacher/miyaguchi/で自身の研究テーマについて
「医療少年院や女子少年院で精神科医として関わってきました。そこで出会った少年たちから学んだことが私の原点です。彼らの様々な境遇や背景を知り、再非行をさせないために必要な社会面、認知面、身体面からの包括的支援法の開発を進めてきました。今後はそれらを学校教育等にも応用できるよう目指しています。犯罪のない社会を一緒に作っていきましょう。」
とコメントし、研究の社会的意義について
「本来保護しなければならない障害をもった子どもたちが、その支援がうまくいかず非行や犯罪をして加害者となり、被害者を作るような実態があることを知りました。学校教育において、家庭において、地域社会において何が問題だったのか、どうすれば非行を防げたのか、非行化した少年たちにどのような教育が効果的なのか、そして今、同じようなリスクをもっている子どもたちにこれからどのような教育ができるのか、これらを学校や福祉施設などの教育現場にフィードバックすることが研究の一つの使命だと思っています。現在、刑務所にいる受刑者を 1 人養うのに約 300 万円かかるという試算があります（施設運営費や人件費を含む）。しかも彼らは被害者を作っているケースが多いです。もしその受刑者の中の 1 人でも健全な納税者に変えたならすごい経済効果があります。」
と明記している。
宮口教授が言うようにコグトレ発案の動機が「被害者を生み出さず、健全な納税者たる障害者をつくることによる経済効果」をはかることであるならば、それはインクルーシブの思想の

対極にあるものである。
⑪障害のある子どもたちは「本来保護されるべき子ども」なのだろうか？障害のある子どもたちは加害者ではなく、被害者になることの方がよほど多いのではないか？津久井やまゆり園では無辜の障害者たちが「税金の無駄遣い」とされ、殺された事実を忘れてはならない。
（4）学校現場へのリテラシーなきコグトレの導入をますます助長させている。
⑫もはやコグトレは大阪府内だけではなく全国各地に広がっている実態がある。書店の棚には関連書籍が並び、安易な指導技術の「ハウ・ツウ」を提供する。コグトレを半ば強制的に使用させる学校があったり、市町村すべての学校への導入を図る教育委員会もあるという。
「多様性の尊重」、「一人ひとりにあった多様な学び方」という言葉とは裏腹に、「ハウ・ツウ教材」を使った安易な指導が広がる結果となっている。
⑬これまでインクルーシブ教育をめざして、試行錯誤を繰り返しながら教材づくり、授業づくりに取り組んできた教員、学校の取り組みと努力を根本から覆そうとするものである。

縷々述べてきたように、私たちは 2021 年 7 月 5 日午後 6 時 30 分放送の NHK ニュース「ほっと関西」の報道内容を到底看過することはできません。
ここに抗議するとともに、“高校問題を考える大阪連絡会”との話し合いを申し入れます。